

春の朝霞

土田龍太郎

世にあまた遺れる芭蕉庵桃青の發句、その品さまざまにて一とほりならぬはいふもさらなれど、吟詠を一わたりけみしゆくに、げに風雅の道ここに究まれりとおぼゆるまでにたぐひなくめでたき句のあれこれ目とまるはかしこきことよなし。

今ここにわきて勘へまほしきは、かの野ざらしの旅のほとりにてものせし春霞の一句にほかならず。桃青翁の江戸を發ちしは貞享元年八月にて、海道を上り熱田に詣でさらに伊賀の故郷にてしばし憩へる内に年改まりたり。やがてまた杖を曳きて大和路に出づる道のほとりにて

春なれや名もなき山の朝霞

と口遊めりしこと甲子吟行に記せり。

春のはや立そめぬるがゆゑにてもあらむ、かなたに望む名もなき山さへもさすが霞の立ちて見ゆるぞかしといふばかりのなにもなき春の朝ぼらけのけしきをただ十七字もて一息に云ひ下したり。

かかる一句なんの難しきかどとはなく、あからさまに聞き流すばかりには耳に立つ一ふしだにあらず、さながらうち捨ててやみなむとも苦しかるまじくぞおぼゆらむかし。さはれまことはこの句の意深きことただならねば、さしもなきことにあたりてうちつけに想ひ出さるるにつけてはじめてそのたへなるおもむきのふと悟らるるはくすしきこといはむかたなし。かかるをりは蕉風俳諧の道の奥を覗き見る心地さへするぞいみじき。

一句のうちことに心をとどめであるまじきは、名もなき山のといへる中七字にて、一句のおもむきのはてなきまでに深くなりおほせたるは、まさにこの名もなきてふ一語のはたらきのゆゑなれば、これぞげに字眼なりともやいふべからむ。

年ごとの春の訪れ、天地自然のさがたきわざなれば、時至りて霞の立ちそむるは、み吉野など名所にしも限るべからず、よしや名もなき山なりとも霞の見えではあるまじきことなし。このあまねきことわりを一句の内に收めむとせば、世に名に立てる山を云はむよりは名もなき山を言はむこそそのかひはるかにまさりぬべけれ。わざと名もなき山を云ひてはじめて、名あるも名なきもわがちなく天地にひとへにゆきわたりてあますところなき造化のいさをにたやすくえ思ひ至るがゆゑなり。

この芭蕉發句におのづと思ひよそへらるるは、その上平定文の歌合にて壬生忠岑の詠めりし

春立つといふばかりにやみ吉野の

山もかすみてけさは見ゆらむ

といへる一首なれど、こは拾遺和歌集第一卷春に入りたり。この句と歌と言葉の表ばかり比ぶるほどは意^{こころ}あひかよへるやにもおぼゆらめどもまことはさらに同じからず。春立てりと思ふのみにてはや霞の見ゆる心地ぞするぞかしといふ歌の意^{こころ}にひきかへて、發句にては霞を見てはじめて春の訪れにおどろかさるるさまを述べたり。されば春と霞とことのついで、歌と句といたくたがひたればうらうへなりともや云ひつべからむ。

歌と句といづれまされりやとみには定めがたきはさることなれども、春立つままに心の浮き立つさまを謳ひてなさけありおもしろきこと、忠岑の一首さすが拾遺集の巻頭歌たるにはぢざるなり。芭蕉發句はこれにことかはりて、春立つころの朝ぼらけのけしきによせて抗ひがたき四時變遷のことわりをさりげなくかいま見せむとせり。されば一句の規模いとも廣遠にして、なまなかの詩歌のえ及ばぬさかひに至りぬれば、もしかりに哲理めきたるかたによせて勘へなば、いとしも卓れたりとぞいはまほしき。

和歌と俳諧とただ三十一字と十七字の数のみひとしからぬがごとくにも見ゆらめども、そのすがたとはたらきのおひ異なることえ辨へではあるべからず。歌と句それぞれになへるわざとたくみ同じからず、歌人と俳人おのがじし志す道のつひのはてのかたみに隔たれるさま、すでにけみせし忠岑の歌と芭蕉の句を並べ見るにつけておのづと悟らるるこそげにかしこけれといはではあるべけむ。

(令和六年十二月二十二日受附)